

12²⁰⁰⁹
December

弘前大学

学園だより

題字：遠藤正彦 学長

VOL. 165



「途方もない祈り。」制作 教育学部学生 山中 桃

I	特集 弘前大学創立60周年記念 アースビジョン 60周年記念学生参加事業	— 2 2 4
II	海外だより	— 8
III	第5回「言語力」大賞コンテスト	— 10
IV	総合文化祭報告	— 14
V	新任教員自己紹介	— 17
VI	けいじばんコーナー	— 17
VII	編集後記	— 18

特集

弘前大学創立60周年記念Ⅱ

地球の活動をリアルタイム

理工学研究科 小 菅 正 裕

本学の創立60周年記念事業の一つとして、コラボ弘大の1階に「アースビジョン」が設置されました。アースビジョンは直径1.5メートルの大型球形スクリーンと65インチの大型ディスプレイ、操作用のタッチパネルとトラックボールから成ります。黒い壁面を背景にしたアースビジョンは、宇宙空間に浮かぶ地球をイメージした空間構成となっています。このアースビジョンとはどのようなものなのでしょうか？

アースビジョンの特徴

アースビジョンの初期状態では、球形スクリーンに表示された地球がゆっくりと回転しています。地球の上には最近1年間に発生した地震の震源分布と最新の地震が表示されています。

アースビジョンの第一の特徴は、この表示の内容を変えたり、表示の拡大や回転を自分で行うことができる点です。その操作は、球形スクリーンの前側の操作台にあるタッチパネルとトラックボールで行います。表示内容の選択

は、タッチパネルのメニューに触れることで行い、同じ内容が65インチ大型ディスプレイにも表示されます。タッチパネルの右側のトラックボールを指先で転がすことで、球形スクリーンの表示を回転させることができます。それにより、普段目にする地図とは違った角度から地球を見ることができます。

第二の特徴は、地震および気象について常に最新の状態が表示されていることです。アースビジョンの地震データは、グローバルCMTプロジェクトによりアメリカのコロンビア大学から電子メールで届く情報を利用して、データベースに最新の情報を加えていきながら表示する仕組みになっています。テレビや新聞で報道された地震がどこで起こったものか、アースビジョンを見ればすぐにわかります。気象情報は、ウェザーニューズ社のホームページの一部を表示していて、webカメラや世界の雲の分布によって、気象の今の状況を知ることができます。台風シーズンにはその目を確認することもできます。

アースビジョンの表示内容

アースビジョンでは、地震モニタリング、気象モニタリング、地域交流コンテンツが表示できます。

「地震モニタリング」では世界の地震活動の様子を表示します。タッチパネルにより海底地形の色の濃淡を強調したり、火山の分布を表示させることもできます。また、震源を表示する期間と震源の深さの範囲が指定できます。震源の分布を見ると日本が地震国であることがよくわかりますが、丸の色で表される震源の深さに注目すると、地球の活動について知ることができます。線状あるいは帯状に分布する地震は、地球の表面を覆う厚さ100 km程の固い岩盤の層（プレート）の境目で発生しているものです。深い地震が発生しているところはプレートが沈み込んでいるところ、浅い地震しか発生しないところは2つのプレートが開いているか横にすれているところです。そういう場所がどこにあるのか、震源分布と海底地形にどのような関係があるのか、などを自分で発見してもらう



に表示するアースビジョン



ことが、アースビジョンの狙いでもあります。

「気象モニタリング」でもグローバルな気象情報を表示しています。世界各地のwebカメラの映像、世界の雲の分布、昼夜の分布、そしてケッペンの気候区分図です。昼夜の分布では、球形スクリーンと平面のディスプレイとを比べてみましょう。

「地域交流コンテンツ」には、サイエンス・パーク案内をはじめとする大学紹介や「弘前ねぶた」などの地域情報を盛り込んでいます。写真に触れると拡大表示します。

デジタルフォトビジョン にも注目

アースビジョン周囲の壁面に設置した6枚のデジタルフォトビジョンで

は、理工学研究科の各専攻分野の教育・研究活動を紹介しています。これらは今後さらに充実した内容となる予定です。

球形スクリーン左側の2枚のディスプレイには、理工学研究科附属地震火山観測所提供のコンテンツが表示されています。観測所では、地震計で測定した地面の揺れ(地動)の分布を準リアルタイムで表示するシステムを開発し、波浪や風などによる微弱な地動の強弱の分布もわかる図として表示しています。もう1枚のディスプレイでは気象庁が発表する緊急地震速報を表示していて、弘前での予測震度、弘前へ主要動(S波)が到達するまでの秒数がわかるようになっています。

まずは見てみましょう

以上のようにアースビジョンでは、地震と気象の情報をグローバルにかつリアルタイムに表示しています。多彩なメニューから選んだ表示をトラックボールで回転させて眺めることは、新鮮な驚きを提供してくれるでしょう。これだけのことができるシステムはおそらく国内には例がなく、弘前大学が誇る施設と言えると思います。百聞は一見にしかず、さあ、あなたもアースビジョンに足を運んで、まずは触れてみましょう。操作が難しそうという心配はご無用です。アースビジョンそばの案内カウンターには、操作の説明書が用意してあります。発見はタッチから始まります。

平成20年度(昨年度)学祭実行委員会

「第60回弘大祭参加団体大抽選会」

平成20年度学祭実行委員会による「第60回弘大祭参加団体大抽選会」が平成21年10月24日(土)に総合文化祭特設ステージで実施されました。この抽選会は、総合文化祭に参加している団体(88団体)を対象にして実施し、事前の説明会で周知していたため、当初の予定よりも多くの団体が参加しました。

当日は、図書カード15,000円分・バーベキューセット・カップ麺・つがるロマン新米30kgなどの商品が用意され、須藤理事の挨拶後、抽選が行われました。抽選する商品の順番を工夫したことにより、大変抽選会場が盛り上がり、イベント自体の時間は、17時30分から18時までの30分であったが、充実した時間となりました。



弘前大学学生中央委員会

「弘大シンポジウム」

弘前大学では、11月13日に創立50周年記念会館にて「弘大シンポジウム」が創立60周年記念事業の一環として開催されました。

主催の弘前大学学生中央委員会は、事前に「私が学長だったら、〇〇〇します!!」のテーマで募集を行い、学生から寄せられた意見約100件の中から、「学祭に力を入れます!」、「喫煙室を設置します!」、「コラボ弘大を活気ある施設にします!」、「履修する授業数の応じて授業料を徴収します!」の四つをシンポジウムのテーマに選びました。

当日は、選ばれた発表者が中心となり、参加学生が各テーマに分かれて討論し、提案を全体発表する形で進められました。参加者の投票により「履修する授業数に応じて授業料を徴収します!」を発表した人文学部3年福井奨士君が最優秀を受賞しました。

最後に議論の様子を見学していた遠藤学長から、各テーマごとにコメントがあり、「学生が大学のことについて

ディスカッションすることはありがたい。日本一の地方大学を目指して行きたい。」と述べられた。



弘前大学フィルハーモニー管弦楽団

「第40回定期演奏会」

平成21年11月22日(日)に弘前市民会館大ホールで第40回定期演奏会が開催されました。

来場者は、470人程で例年よりも多くの来場者がありました。当楽団は、40年を飾るにあたり、メインプログラムとしてカリンニコフ交響曲第1番を初めて演奏しました。その他、歌劇「ザンパ」序曲(エロール作曲)、バレエ組曲「シルヴィア」(ドリーブ作曲)等、耳にする機会は少ないが、メロディが親しみやすく、物語性のあるプログラム構成で演奏が行われました。



弘前・スライド・ミュゼック

「弘前・スライド・ミュゼック 第1回定期演奏会」

弘前・スライド・ミュゼックによる「第1回定期演奏会」が平成21年11月30日(月)に弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールで開催されました。

弘前・スライド・ミュゼックは、弘前大学のトロンボーン愛好家によって、大編成のトロンボーンアンサンブルの音楽を共有することを目的として平成20年1月に結成され、この度第1回目の定期演奏会を開催することになりました。

当日は月曜日の夜であったにもかかわらず、入場者数は71名で、年齢層も中学生から年配の方まで幅広い方々が来場されました。

演奏会后、代表者は「今後とも弘前大学の芸術活動にさらに貢献できるように、PRをし第2回定期演奏会を

開催していける様に努力して参ります。」と語りました。



「UTMの思い出と リン・アレグザンダー博士」

人文学部教員
田中一隆

筆者は2008年8月から約5ヶ月間、大学間交流協定に基づき、テネシー大学マーティン校(The University of Tennessee at Martin. 以下 UTM と略記)に客員教授として赴任し、シェイクスピアを中心とするイギリス・ルネサンス演劇について研究と教育を行った。筆者はまた、昨年(2017)の10月中旬、2週間の日程で、リン・アレグザンダー博士(Dr. Lynn Alexander)をUTMから客員教授として本学にお迎えし、二回の学術講演会を開催、総合司会も務めさせていただいた。博士は、人文芸術学部(College of Humanities and Fine Art)学部長の職にあり、UTMの文系学部において中心的な役割を果たしておられる。筆者の研究発表の司会を務めてくださった恩人でもある。このように、2年度に渡って、本学とUTMとの交流において若干の役割を果たすことができた経験が、今回「学園便り」に一文を寄せるよう依頼された所以であろう。

UTMは、周知のように、弘前大学が姉妹校関係を結んだ最初の大学であり、今年で交流30周年を迎える。本学とUTMが、かかる長きにわたって教育・研究上の交流を継続することができたのは、弘前大学国際交流センターとUTM国際交流部(Office of International Program)のスタッフの方々の並々ならぬ努力の賜である。この場をお借りして、まずお礼を申し上げます。

さて、限られた紙面ではあるが、主に教育と研究という学術的な側面から、一連の交流の意義について、筆者

の印象も含めて述べてみたい。まず、引用から始めよう。

テネシー大学マーティン校はのんびりしていて、本当に過ごしやすい大学です。でも、のんびりした中にも厳しさがあります。学生の成績は徹底的に管理され、要求される基準もかなり高いです。大学は一生懸命勉強する雰囲気にあふれ、学生も道徳的に優れた側面を数多く持っています。(田舎であることと、キリスト教の影響が大きいと思います。)学生の主体的な勉強を補助するシステムがしっかりと確立されています。正しい文法で、説得力のある英語の文章を書く能力を養うことが英文科の第一のミッション(こちらでは mission という言葉を使います。)だという自負があるようです。学生をある一定の基準にまで引き上げるためには努力を惜しまない、という常識が共有されているようです。大いに勉強になりました。

私事で恐縮だが、これは筆者がアメリカ滞在中に複数の知人に書き送ったメールの一部である。UTMの教育・研究に関する筆者の印象はいまでも基本的に変わっていない。この文章を書いたときの、あのかすかな興奮はいまも覚えている。そこで、本稿では、人文学部英文科に附属する「ホーテンス・パーリッシュ・ライティングセンター」(Hortense Parrish Writing Center)を通して、UTMの教育を保証するための「学生の主体的な勉強を補助するシステム」の一端を紹介しよう。最近では日本の大学でも、母語による読み書き能力の低下が問題になっているが、一足先に大衆化を迎えたアメリカの大学も同じ問題を抱えてい

る。以下センターの「ミッション」を引用する。

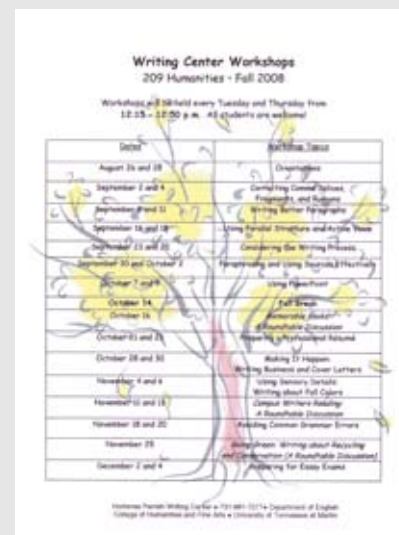
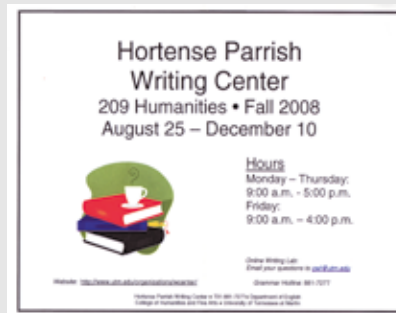
The Hortense Parrish Writing Center is committed to helping students become better editors and writers. Through individualized tutoring, writing workshops, computer workshops, roundtable discussions, basic skills review, Talk Time, and other offerings, the Writing Center serves as an academic support service for UT Martin students. Center assistants work with students at all levels of the writing process as they help students learn how to evaluate and edit prose.

学生が「より優れた編集者・書き手になるのを手助けする」という目的は明快である。もちろん、「編集者」というのは雑誌社に勤める職業的な編集者のことを指すのではなく、自分が自らの作文の良き「編集者」になるという意味である。センターは、英文科の学生だけではなく全学の学生の面倒をみる。説得的な文章を書く力は、単に英文科のみならず理系学部を含む全学部の学生に必須だからだ。ライティングセンターは、論文から期末レポートの書き方にいたるまで、あらゆる種類の文章を、「文法」、「パラグラフ」、「組み立て」(organization)、「文体」と「形式」(style and format)等の観点から、個人指導で問題を指摘したり、添削してくれる。当然のことだが、できないこともあらかじめ明示されていて、校正に利用する、レポートを代筆する、盗作した論文を添削する、出題者の意図を説明する、というような事項が挙げられている。担当するスタッフには、英文科の教員のみならず学生も加わっている。このセンターのミッションに参加できるのは、学生にとって名誉なことである。いずれにせよ、本センターは、書く力を養うために徹底的に学生を訓練することが、人文学部英文科が大学全体の中で果たすべき

主要な目的の一つである、という意識が強く現れているシステムである。翻って日本はどうだろうか。目的をはっきりと謳い(これをミッション・ステートメント—mission statementと呼ぶ)、その目的の実現に向かってできるだけ合理的なシステムを構築するというあたりまえのことができていだろうか。はなはだ心もとないと言わなければならない。

リン・アレグザンダー博士の学術講演会も、筆者の中で、教育と研究に対する真摯な態度と一貫性というテーマで捉えることができる。博士は、タルサ大学(Tulsa University)でPhDの称号を授けられた俊英で、御専門は「イギリス・ヴィクトリア朝の文学と文化」だが、講演では、19世紀イギリスにおける労働者階級の男性の表象に焦点をあてながら、当時の小説や絵画が労働者階級に対する「共感」(“sympathy”)をどのように喚起したかについて詳細な分析が提示された。あるいはまた、19世紀アメリカの女性作家たちが「女性の自立」というテーマで対照的な作品を書いていることにも触れられ、この時代にアメリカで女性の自立ということが大きな問題として意識化され始めたことを示しているという興味深い指摘もなされた。アレグザンダー博士の御講演は、あたかも壇上に、北米最大の学会であるアメリカ近代語協会(The Modern Language Association of America)での博士の研究発表がそのまま再現されたかのように、厳粛な雰囲気になり、学問の厳しさとよろこびを同時に実感できる体験であったと深く思う。博士の講演に同席できた我々は幸いであった。

リン先生(こう呼んだ方が筆者にとってはしっくりする)はまた、筆者のゼミナールにも参加してくださいました。ゼミでは、当初の予定では、ジェイン・オースティンというイギリスの女流作家の作品を例にして、「小説」と「映画」という媒体の違いによって、伝達内容はどのような変容を被るのかに



ついて、短い論文を読んでいただく予定でいた。しかし、せっかくならびを訪れていたのに、3回も研究発表をお願いするのも気が引けたので(もちろんリン先生には快く引き受けていただいたのだが)、急遽自由討論ということにして、ゼミの学生と一緒に、(アメリカの政治や文化、食べ物や習慣の違い、日本の印象等の)身近な話題について話をさせていただいた。リン先生の気さくで暖かい人柄を十分に感じることができて、ゼミ生にとっても(単に英語を聞いて話す、という意味においてではなく)きわめて有意義な時間になったと思う。

2年度に渡るUTMとの交流は、教育と研究における真摯な取組をじかに経験するという意味で、筆者に豊かな実りをもたらした。両大学の関係者の皆様に重ね重ねお礼を申し上げるとともに、この実りの種を次の芽の為に詩く責任は、言うまでもなく筆者にあることを申し添えて、筆を置くことにします。ありがとうございました。

Ⅲ 第5回「言語力」大賞コンテスト

「言語力」とは、読む力・書く力・調べる力・伝える力を含めています。
弘前大学附属図書館は、学生の皆さんに『言語力』を養ってもらおうと、平成17年度より「言語力」大賞コンテストを実施しています。第5回コンテストの受賞作品から部門Ⅰ「文学作品部門」の大賞を掲載します。

幻 灯 夢

大賞

人文学部2年 三 浦 元 義

灯籠とうろうの流るる夜に、幻灯機を出したのはおそらくは娘たちだろう。箆たんすの奥を覗き込んで懐かしがり、古い写真や骨董品を引っ張り出して。あるいはそれは、財産分与の為の事前調査か何かだったのかもしれない。我が子ながらに強かに育ったものだと、母親の仏間で席争いをする娘たちを見て苦笑いをせずにはいられなかった。

幻灯機に残っていたガラス板は、「カッコウとホトトギス」の最初的一幕だった。小さい頃に聞かされて、今でも忘れられない物語の一つ、寝物語に聞かされた御伽草子おとぎ。私にその話を聞かせてくれたのは十も歳の離れた姉だった。

電源を入れると、幻灯の光は掠れて破れた障子に映し出され、私を何時とも知れない場所へと誘うように明滅した。

今でこそ身代を持ち直したこの家だが、子どもの時はひもじさに眠れない夜もあった。そんな時に私が寒さと飢えでめそめそとして

いると、姉が枕もとまでやって来て物語を聞かせてくれた。私と違い、気風の良い姉であったと覚えている。器量も良く、肌は白蟻はくろうのようと言われていた。透き通るような白い肌は快活な姉の性分とは相容れなかったが、紋付がよく似合うと評判だった。

カッコウとホトトギスの話を聞かせてくれた夜は、殊更ことさらに暑い夏の夜であった。風鈴の音も聞こえない、凝こごったような熱帯夜であった。語ってくれた物語は、母親違いの貧しい姉妹の話だった。

その夜、姉はいつものように黄色いランプの灯火を揺らしながら現れた。床の上に置かれたランプには虫が寄り、ちらちらと影を揺らした。私の背後で輪郭のない影が微かに蠢うごめいていた。それを不思議に思い寝がえりをうとうとすると不意に、ピタリと背に吸い付くような感触を私は感じた。

姉の肌の感触であった。私の背にしがみつくように、姉は私の胸

のあたりに手を回し抱きかかえていた。人形のような白さの手には一切の熱さがなく、むしろひんやりとした感触に背筋がぞくりと浮き上がるのを感じた。

『姉あねむすめ娘はある日、山でキノコを採って家に帰ったが、妹いもうとむすめ娘が帰らないうちにそのキノコを一つ食べてしまった。食べてみるとそれは大変にうまかった。二つ三つと食べるうち止められなくなり、とうとう全て食べてしまった。』

そうすると、体が汗ばんで仕方がなくなり姉娘は家を飛び出して風当たりの良い谷間まで走っていった。たまらずに衣服を脱いでいると、後ろから妹娘が駆けつけてきた。姉娘が後悔でいたたまれずにいると、どんどんと体中に毛が生えて、背中が張ってくるのだった。やがて毛で覆われた背中を広げると、姉娘は谷間に羽を広げて飛び去って行ってしまった。

それをみた妹娘は、帰ってこう、帰ってこう、と谷間に向かって

叫び続けた。いつしか妹娘自身も鳥となり、今でもカッコウ、カッコウと鳴き続けている。飛び去っていった姉娘は、放ってこう、放ってこう、と鳴き続けた。今でも姉娘は不如帰としてホウツクレ、ホウツクレと鳴き続けているという]

姉は私の背に抱きついたまま、^{しだ}耳朶に囁くようにこの物語を語った。その声は今思えば^{ひど}酷く^{なま}艶めかしくもあったが、その体と同様に冷たく乾いた響きが放つ凜とした美しさに圧倒され、私の中には不思議なほど^{やま}疾しい気持ちは湧いてこなかった。

「姉娘のしたことは、そんなにも悪いことだったのかしら」

そう呟いた声に振り向いた時に見た姉の顔は、今でも私の眼に焼き付いている。答えを求めて彷徨う目が捉えていたのは、先ほどから部屋を飛び蝶の軌跡だった。白い肌は暗闇の中で浮かび上がり、その表情を見守りながら私はその美しさに息をのんだ。

「もしも僕が妹娘だとしたら、怒るだろうな」

姉の視線が自分に注がれているのを感じながら、私は言った。

「でも、きっと許してあげると思う」

姉は、愛しむ様に私の頭を撫

で、優しく抱きしめた。

「馬鹿だね、あんたは」

私はその笑い声が、今にも泣きそうな声のように聞こえた。姉は、私が眠るまで私の頭をなで続けてくれた。そしてずっと、私の頭を放してはくれなかった。

その次の日、目が覚めたときには姉はいなかった。地主の三男坊と、駆け落ちをしたのだという。

家から無くなっていたのは紋付と、前の夜に私のところへ持ってきたランプが一つきりであった。

^{かす}風鈴が幽かに鳴るのが聞こえた。風の音に乗せられて私は^{いざな}幻灯の誘う世界から、現実に帰ってきたような気がした。

どんなに努めても、あの夜のことはその時々境遇を抜きにして思い出すことはできなかった。姉は何故あんな物語を語ったのか、それが許しを求めての行為だと信じていたころも、そうではなかったのだと知ってしまった後でも。私は思い出す度、自らの言葉を否定するべきか、肯定するべきかを迫られた。

だとすれば今感じたものは夢だったのだろうか。障子の向こうに陰るのは、ぼんやりとした記憶を映し出しているような、そんなものを連想させるようなとろりと

^{かす}霞んだ青い光だった。私はその光の中に溶け込んでいたのだろうか。

幻灯の映し出された障子の裏をゆるりとした影が走った。屋内に吊られたはずの風鈴が音を鳴らした。

子供の時分に小さな^{ふすま}襖の割れ目の奥が気になったように、その影がいったいどこから漏れだしてきたものなのか、私には確かめずにはいられなかった。

障子の向こうは^{けやきぶしん}櫺普請の廊下が黒々と続いていた。長い廊下の先は闇に飲まれ、^{かす}風鈴の幽かな音が発光するように響いてきた。

障子の裏には、カッコウとホトトギスの物語が逆さまに映っていた。裏返しの物語、あの夜姉が語ったのは、まさにそういう物語だった。

私たちに最初の娘が生まれ、妻の^{きょうり}郷里である遠野の家に挨拶をしに行った時のことだった。妻の祖母がまだ赤子であった娘に、何の本も見ずに^{どうどう}滔々と物語を語って聞かせているのを見かけた。そっと耳を澄ませていると、語っているのはカッコウとホトトギスの物語なのだとすることに気がついた。

それは、私の聞いた物語とはまるで違っていた。

異母姉妹の出てくるところは同

じだった。だが、姉娘の採ってきたものはキノコではなく芋だった。姉娘はその芋の真ん中の柔らかい部分を妹娘に与えた。そして、姉は周りの固い部分を食べた。しかし妹娘は、姉がもっと美味しいものを食べているのではないかという疑念に囚われて、ついに包丁を持ち出して姉娘の腹を裂いてそれを奪おうとした。だが、姉娘の腸から出てくるのは固いガンコ芋ばかり。姉娘は「ガンコ芋食った」「ガンコ芋食った」と嘆き続けて死に、鳥となって飛び去っていったのだという。事実を知って悔やんだ妹娘は「包丁立てた」「包丁立てた」と泣き泣き叫び続けたがどうにもならなかった。やがて妹娘も鳥となり、今でも「ホッチョタテタ」「ホッチョタテタ」と鳴いているという。

この話を聞いた時、私は青褪^{あおざ}めて息もできず、妻の祖母に気がつかれないように部屋を抜け出した瞬間、激しい眩暈^{めまい}に襲われた。

思えば、そんな簡単に駆け落ちなど出来るものなのか。地主の子供ともなれば、いくら三男坊とはいえ体面というものがあるだろう。暮らしてゆくだけでも容易ではない。例えば、子供などが出来た日には、

あの紋付は、親が買ったもので

はなかった。では、誰から送られたものだったのか。

姉がいなくなってから、寂しさに眠れない夜が幾つもあった。だが、その日から寒さと飢えに眠れなくなることはなかった。親は姉のことをその日以来一言も話さなくなった。私はその沈黙を怒りのせいだと思った。

姉はあの夜、本当は何を伝えたかったのか。肌を触れ合わせてまで私に語りたかったことは。私は姉の言うことのできなかった想いと、どこまでも冷え切った肢体を想って、口に指を押し込みながら込み上げてくるものを必死に堪えた。

遠野の家から帰ってから、私は姉の消息を探ろうと必死になった。両親は既に亡くなっていたが、以前親しくしていた近所の人や地主の縁者を訪ねて回った。私は、姉に子供を見せたいので嫁ぎ先を知りたいのだと言って回ったが、皆一様に口は重かった。調べるうち、ふと私は自らが姉の腸^{はらわた}を裂こうとしているのではないだろうか、という疑念に捉われてぞっとした。姉の食べた芋の固さを思っ^てて身震いがした。本当の物語など、聞かなければよかったのにとさえ思った。

以前は姉のことを恨みもした。許さねばと思いつつも許せず、そして余計に執着が増し憎しみが増し、恋しさが募った。今は、姉を恨んだ自分が許せなかった。

暗くて長い廊下の片隅に、白く儂^{うづくま}く蹲っている影を見た。娘たちの泊まっている部屋の前だった。風鈴の音が響いた。

幻灯の光の反射だろうか。それにしてもその影はあまりにも白かった。揺らめきは衣擦れのようだった。華麗な花柄ではなく、粋な縮緬^{ちりめん}の紋付だった。

だがそれは瞬きの間に煙の様に消えてしまった。幽^{かす}かに残る余韻にすがろうと手を伸ばしたときだった。背の方から幻灯の青い光とは違う、暖かな色見の光が滲んでくるのを感じた。私の影が目の前で動揺を映すかのように不安げに揺れた。背中がひんやりとした。その冷たさは陶磁を思わせたが、確かに触れるか触れぬかといった具合の、柔らかさのような感覚もあった。

背に寄り添うように立っているのだということはわかった。振り向くことはできなかった。せめて一言だけでも、何かを伝えたかった。謝罪の思いが、許しをこ^{あがな}う嘆きが、一人残されたことの購^{あがな}いを

求める呪詛が、言い切れぬ感謝が、渦を巻き、どれ一つとして言葉になることはなかった。途方にくれながら見やった障子の向こうには、光の粉を捲きながら舞う蝶の影があった。

「馬鹿だね、あんたは」
それは確かに、笑い声だった。

穏やかな、吐息のような。

部屋の中には、^{すたれ}簾越しの朝日が差し込み、何とも言えない熱気が籠^{こも}っていた。幻灯機を点け放しにしたまま眠ってしまったらしい。幻灯機の光は消えていた。電源を入れ直しても、光が再びつくこと

はなかった。どことなく夢見心地のまま見回した部屋の中に、筆筒の中から出されたままの雑貨やガラクタの中に紛れて、見慣れたランプが置いてあるのを、私は見つけた。

了

講評

「カッコウとホトトギス」という民俗学的な逸話を素材にして、「私」が姉との思い出を回想するなかで、人の心の動きを表現した力作であった。「遠野」、「樺普請の廊下」、オシラ様信仰の由来を思わせるシュチュエーションの設定など、各場面での小道具のしつらえは見事であり、読者を幻想の世界、あるいはかつて国内でどこでも見られた常民の日常生活に誘う技巧は傑出している。

第5回弘前大学学生「言語力」大賞コンテスト 受賞者一覧

I：文学作品部門（ジャンルは自由）

大賞	人文学部2年	三浦元義	「幻灯夢」
優秀賞	教育学部4年	民部田真由子	「四季」
	人文学部2年	柳谷智美	「もしも、ホテルみたいなら」
	理工学部4年	水口元	「写真」
佳作	人文学部4年	山本浩輔	「落書き」

II：評論部門（テーマ「太宰治：一人と作品－」）

*応募者無し

られ、なかには3日間通して来てくださった方もいるほどです。弘大祭が昨年以上に地域に根ざした大学祭になっていっていることが実感できます。

総合文化祭は、学生が主催する弘大祭と教職員が主催する学術文化祭が一体となった、全国でも希な大学祭です。今年で第9回目を迎え、模擬店やイベントも毎年規模が大きくなっていっています。そしてもう一

つの特徴が、学祭期間中は構内全面禁酒・禁煙を徹底しているという点です。ほとんどの学生は禁酒・禁煙を守り、安全な弘大祭が実現している状況です。ですが外部への告知が今ひとつ足りないらしく、外部からの来場者の中には知らなかったという方もいらっしゃいます。来年は今以上の告知と、みなさまのご協力が必要になってくると考えています。

今年は創立60周年の総合文化祭で

もありました。弘大祭も60回目という節目を超え、さらなる発展をすることでしょう。もちろん来年は今年以上に盛り上がること間違いなしです！学生のみなさんが参加して初めて来場者も楽しむことができる弘大祭をつくることができます。来年もみんなで盛り上がりましょう！！



学長主役イベント



人文学部と理工学部との間を走る駅伝ランナー



看板娘コンテスト



Mr. マサツクの科学実験教室



よさこい弘大参加団体にとる合同演舞



躍動感ある演技をするよさこい弘大参加団体



共通教育棟内で演奏するジャズ研究会



大勢の人達と盛り上がるお祭りストリート

V 新任教員自己紹介

理工学研究科



知能機械工学科
准教授

岩谷 靖

10月から理工学研究科(理工学部・知能機械工学科)に着任いたしました岩谷靖と申します。仙台より参りました。ロボット工学に関する研究に取り組んでおり、特に視覚認識と運動制御を統合した認識行動システムの開発を行っております。

これからの時期、弘前では寒く、雪の多い季節になると伺っておりますが、学生や教職員の皆様と楽しく過ごし、桜の時期を待ちたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

農学生命科学部



園芸農学科
食品経済コース
准教授

石塚 哉史

この度、10月より農学生命科学部園芸農学科に着任致しました。以前は、農林水産省の所管法人で特用農作物の生産・加工・流通に係る施策及び調査・研究事業を統括しておりました。主な研究テーマは、日系食品企業

のアジア進出(中国・緬甸等)による国内農業への影響を分析しております。大学への就職はもとより、関東以北での生活が初めてと不慣れな点が多く、皆様にお手数をおかけすると思っておりますが何卒宜しくお願いたします。

VI けいじばんコーナー

弘前大学創立60周年記念学生参加事業

● 弘前大学混声合唱団 第47回定期演奏会

1月16日(土) 18時~20時
弘前文化センター 入場料 500円

● 弘前大学劇団プランクスター 第7回公演「Answer」

1月16日(土) 13時~16時 / 16時~21時
1月17日(日) 14時~16時
スペースデネガ 入場料無料

● 弘前大学教育学部美術教育講座 第21年度弘前大学教育学部 美術教育講座卒業研究・制作展

[学内展] 2月5日(金)、6日(土)、8日(月) 9時~19時
弘前大学学生会館3階
[学外展] 2月20日(土)~21日(日) 11時~19時
ギャラリー・デネガ いずれも入場料無料

● 弘前大学教育学部美術教育講座 藤井花恵個展 藤井花恵個展実行委員会

2月17日(水)~23日(火) 10時~18時
田中屋画廊 入場料無料

● 弘前大学津軽三味線サークル 5周年記念コンサート

2月20日(土) 14時30分~
中三弘前店8階 スペース・アストロ 入場料100円

● 弘前大学映画研究会 自主上映会 七色欄灯「高橋泉監督特集」

3月20日(土) 14時~
入場料 (前売り1,000円 当日1,200円)

問い合わせ先

弘前大学学務部 学生課 学生支援グループ
内線 3112、3113

大学軟式野球国際大会の 日本代表選抜メンバーの選出

12月17日(木)に第5回日台大学軟式野球親善国際大会の日本代表選抜メンバーに選出され出場した理工学部3年亀井岳秋君と指導教員小松尚夫教授が報告及び挨拶のため学長を訪問しました。

この大会は、全国約220の加盟大

学の中から日本代表を選抜し台湾の代表4チームと対戦する親善国際大会で国立大学からは亀井君1名が選出されました。

学長からは、今回の代表選手の選抜方法(全日本大学軟式野球選手権大会での活躍)、本学の軟式野球の成績(第

32回全日本大学軟式野球選手権大会奥羽地区予選を優勝)などについて質問がありました。

また、亀井君からは、大学卒業後は、教師になり高校野球の指導者になる夢を語りました



Ⅶ 編集後記

学園だより165号をお届けいたします。本号は、前号から2回にわたり組まれた弘前大学創立60周年記念特集の他、海外だより、第5回「言語力」大賞コンテスト、総合文化祭報告など、多岐にわたった内容となっております。

編集の際に、委員として読者の方よ

り一足先に原稿に目を通しておりますが、今回も、世の中の情勢よりも学内のことにあまり頓着していなかったことに深く反省させられました。身近なことって意外に知らないものなのですね。

編集にあたり情報をご提供いただきました皆様、また、ご寄稿、ご協力い

ただきました皆様に編集委員一同心から感謝申し上げます。

最後に、表紙の背景となった海から出(いず)る陽の光(編集委員会では、そのように見ることにしました)に、明るい未来への希望を託し、編集後記とさせていただきます。

2009年 弘大生の病気・事故等 による給付補償金は **1668万円** でした。

2009年は約300名の弘前大学生が病気や事故、盗難などのアクシデントに見舞われ、加入している共済あるいは保険から補償されています。

その内容を、大学生協の学生総合共済（以下生協共済）と学生教育研究災害傷害保険（以下学研災）の給付実績をもとにまとめました。※学研災は生協が大学より業務委託を受けて事務を代行しています。

【2008年12月～2009年11月の給付件数と給付金額】

項目	生協共済		学研災		合計	
	給付件数	給付金額	給付件数	給付金額	給付件数	給付金額
病気入院・手術	65人	483万円	0人	0	65人	483万円
事故入院・手術	42人	373万円	3人	14万円	45人	387万円
事故通院・固定具	141人	398万円	0人	0	141人	398万円
盗難・借家人等賠償	20人	140万円	0人	0	20人	140万円
扶養者死亡・見舞金	26人	260万円	0人	0	26人	260万円
合計	294人	1654万円	3人	14万円	297人	1668万円
加入者数(09年11月現在)	4636人		1758人		6394人	

特徴①

病気では消化器系疾患が飛びぬけて高くなっています。

食生活の乱れ、精神的ストレスなどが原因のようです。朝ごはんをしっかり摂る生活習慣をつけることや暴飲を慎むようにしましょう。

特徴②

事故ではクラブ・サークル中のケガが大半を占めます。

去年はラグビーが第1位でしたが、今年はバスケットとバドミントンが第1位となっています。事前の準備運動がケガ予防の秘訣です。

特徴③

日常生活では自転車運転中の事故が多くなっています。

弘前市は道路が狭い、カーブが多いなど、自転車事故が比較的起きやすい町です。自動車との接触事故が多くなっているので注意が必要です。

Q 入院費用はどのくらいかかる？

たとえば大学生が病気で入院したら、どのくらいの入院費用が必要になると思いますか？

- 平均入院日数 **17.5日**
- 治療費用の平均 **143,874円**
- 雑費(交通費等) **32,072円**

2008年の大学生協共済事業報告では、上記のようになっています。治療にかかった費用と雑費の費用合計を、入院日数で割ると1日あたりの入院費用は約1万円となっています。生協共済は、2009年に保障制度が改善され、入院1日あたりの保障日額が1万円と、大学生の実態により合った保障内容となりました。

● 給付の申請手続きは生協店舗で簡単にできます。

(文京地区) SHAREA たび SHOP tel0172-37-6480

(本町地区) 生協医学店 Ferrio tel0172-35-3275

お気軽にお申し出、お問い合わせ下さい。

- 食堂入口に設置されている給付ボードで、毎月の特徴的な病気・事故や給付内容を掲示し、予防の呼びかけもしています。





弘前大学 学園だより Vol.165

2009年12月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。
e-mail: jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp
弘前大学学務部学生課



国立大学法人 弘前大学 「学園だより」編集委員会

委員長

奥野浩子 (教育・学生委員会)

委員

福田健太郎 (人文学部)

杉原かおり (教育学部)

松谷秀哉 (医学研究科)

門前 暁 (保健学研究科)

小松尚夫 (理工学研究科)

藤田 隆 (農学生命科学部)

三浦信義 (学生課)

佐々木忠 (学生課)

印刷：ワタナベサービス株式会社